

# カントの空間論と第二アンチノミー

滝 沢 正 之

はじめに

## (1) 本論文の目的

我々が日常的な経験で出会う諸々の物は、諸部分から構成された合成物である。では、その物を反復的に分割していったとき、いったいなにが生じるのだろうか。単純な実体に到達するのであろうか。それとも、分割は無限に続くのであろうか。古代から続くこの問いを、カントは『純粹理性批判』『超越論的弁証論』『純粹理性のアンチノミー』において、第二アンチノミーと名づけて検討の対象とした。<sup>(1)</sup>

本論文の目的は、この無限分割をめぐる問題を、『純粹理性批判』の空間論および性質の理論に位置づけて考察することにある。後に確認するように、第二アンチノミーの議論は、一見すると『純粹理性批判』の性質の理論に上手く収まらないように思われる。この問題は、より詳細な性質の分類を導入し、また、「不可入性」概念に注目することによって解決される。本論文は、このような一連の議論を展開することで、カントの空間論および性質の理論に適切な整理を与えることを試みる。

## (2) 本論文の構成

本論文は四節からなる。

第一節は、「超越論的弁証論」「純粋理性のアンチノミー」に注目して、第二アンチノミーの基本的な主張を整理する。

第二節は、『純粋理性批判』における性質の理論を整理する。まずは「超越論的弁証論」「純粋理性の理想」「超越論的理想(超越論的原型)について」が扱われ、ついで「超越論的分析論」「原則の体系」が扱われる。そのうえで、第二アンチノミーの問題構成とカントの性質の理論とのあいだの不整合が指摘され、問題提起が行われる。

第三節は、前節で提起された問題に答えるための準備作業として、カントの性質の理論をさらに詳細に規定する。そのさいに鍵となるのは、性質を分類すること、そして、不可入性に注目することである。

第四節では、第三節の議論を踏まえて、第二節で提示した問題にたいする解決が与えられる。

## 1 第二アンチノミーの議論構成

### (1) 第二アンチノミーの対当関係

「超越論的弁証論」「純粋理性のアンチノミー」第二節「純粋理性の反定論」では、カテゴリーの分類にしたがい、四つのアンチノミーが提示される。質のカテゴリーに対応するとされるのが、第二アンチノミーである。この事情を第一節「宇宙論的理念の体系」における導入的な説明で確認しておく。

第二に、かくして、空間における実在性、すなわち物質は、条件づけられたものである。この条件づけられたものの内的な諸条件はその諸部分であり、部分の部分はより隔たった諸条件である。それだからここで、理性がその絶対的総体性を要求するような、背進的総合が成立する。この絶対的総体性は、分割が完遂されることによって以外に

は成立しえない。ただし、分割が完遂されると、物質の実在性は、無へと消失するか、あるいは、もはや物質でないもの、つまり単純なものへと消失するかのどちらかになる。したがって、ここにはまた、諸条件の系列と無条件的なものへの進行がある。(A413/B440)

ここで、「実在性」と「物質」は「すなわち [d. i.]」の一語をもって言いかえられている。すなわち、二つの語は同義である。しかるに、実在性は質のカテゴリーの一つの項目である。ゆえに、物質の無限分割の問題は、質のカテゴリーに対応するというわけだ。<sup>(2)</sup>

さて、第二節「純粹理性の反定論」では、第二アンチノミーの定立および反定立が、以下のようなものとして示される。

定立：世界におけるすべての合成された実体は単純な諸部分から成立しており、また、単純なもの、あるいは単純なものから合成されているもの以外は、どこにも存在しない。(A434/B462)

反定立：世界におけるいかなる合成された物も単純な諸部分から成立しておらず、また、世界においては単純なものはどこにも存在しない。(A435/B463)

定立と反定立は矛盾対当関係にあるように見える。しかし、双方について、それが真であることを証明するかのような論証がある。これは非合理である。これが、第二アンチノミーの問題状況である。そして、「超越論的弁証論」は、この問題を人間理性の本性に根ざした形而上学的な問いのうちの一つと見なし、体系上の特別な位置を与えるのである。<sup>(3)</sup>

この問題状況について、いくつかの確認をしておく。

第二アンチノミーは、物理的実体つまりは物の存在を前提している。さ

らに、そういった実体が諸部分から構成された合成体であることも前提している。そのうえで、論争は、この部分の性格をめぐって展開される。定立は、問題となる対象の部分として、それ以上部分へと分割不可能であるような単純な実体が存在することを主張する。反定立は、そのような実体は存在しないと主張する。もちろん、現象と物それ自体の区別などを考えあわせれば、ここにさらに複雑な事情を読みこむこともできるかもしれない。<sup>(4)</sup>しかし、少なくとも出発点は以上のようなものであると考えてよいだろう。

物理的実体の究極的な構成要素をめぐって、単純な実体が存在するのか、あるいは、実体は無限分割可能なのかを問うことは、古い歴史をもつ由緒正しい形而上学の問題である。たとえばピエール・パール『歴史批評事典』は、この問題をエレアのゼノンを論じるさいに扱っている。<sup>(5)</sup>

近代に至っても、この問題は多くの自然哲学者を魅了した。<sup>(6)</sup>ニュートン（あるいはクラーク）とライプニッツに注目して、カントが二人の対立をそのままアンチノミーの対立に落としこんでいると考える説得的な解釈もある。定立のほうはニュートンの立場に、反定立のほうはライプニッツ的な立場に対応するというわけだ。<sup>(7)</sup>また、それ以外では、たとえばヒューム『人間本性論』の時空論が、カントとはかなり異なる方向でこの問題を扱っており、比較研究も行なわれている。<sup>(8)</sup>

## （２）定立および反定立の証明の概要

つづいて、定立および反定立の証明を確認したい。どちらの証明も背理法を利用する。定立は、反定立の主張を仮定したうえで矛盾を導こうとし、反定立は、定立の主張を仮定したうえで矛盾を導こうとするのである。

以下、再構成した証明を示す。説明不足でわかりにくくなっていると思われるところは適宜補足を行うことで、論旨そのものの問題点が見やすくなるようにしてある。

定立を再度確認しておこう。

定立：世界におけるすべての合成された実体は単純な諸部分から成立しており、また、単純なもの、あるいは単純なものから合成されているもの以外は、どこにも存在しない。(A434/B462)

定立の証明 (A434-6/B462-4) は以下のように整理しうる。

- 1) 合成された実体が諸部分としての単純実体から成立していないと仮定する。
- 2) 仮定より、もしもあらゆる合成を思考のうちで廃棄したとするならば、合成された部分も単純な部分も存在しなくなるため、なにも存在しなくなる。
- 3) なにも存在しないという主張は明らかに偽である。つまり、2) の後件は偽である。
- 4) 3) より、2) の前件「あらゆる合成を思考のうちで廃棄する」が偽であるか、仮定が偽であるか、そのいずれかである。
- 5) 2) の前件は偽ではない。なぜならば、実体の合成は偶然的な関係であるから。
- 6) 4) および5) より、仮定は偽である。
- 7) 1) および6) より、合成された実体は単純な諸部分から成立している。

続いて反定立であるが、その命題は以下のとおりのものであった。

反定立：世界におけるいかなる合成された物も単純な諸部分から成立しておらず、また、世界においては単純なものはどこにも存在しない。(A435/B463)

反定立の証明 (A435-7/B463-5) は二つの部分からなるが、各部分が独立していると考えて、前半のみをまとめておく。<sup>(9)</sup>

- 1) 合成された実体が諸部分としての単純実体から成立していると仮定する。
- 2) 空間の部分は無限分割を許容する。
- 3) 合成関係は空間的であるので、合成されたものの各部分である単純実体は一定の空間を占める。
- 4) 一定の空間を占めるものは複数の部分から合成されて成立している。
- 5) つまり、単純な実体は合成されたものである。これは矛盾であるから、仮定は偽である。
- 6) 合成された実体は単純な諸部分から成立していない。

このように、定立と反定立は、双方が根拠をもちつつ矛盾対当関係を形成し、これが第二アンチノミーの問題状況を形成するのである。

### (3) 第二アンチノミーの解決について

続けて、第二アンチノミーの解決を教科書的なかたちでまとめておこう。

「超越論的弁証論」は、超越論的観念論を導入することで、この矛盾があくまで見かけ上のものでしかないことを示す。定立と反定立が矛盾対当関係にある、という見かけは、現象と物それ自体の区別をしないという誤りにもとづいて成立している。第五節「四個すべての超越論的理念により生じる宇宙論問題の懐疑的表象」によれば、定立側も反定立側も、「宇宙論的理念」と「悟性概念」とを不当に引きくらべている。それゆえ、大きすぎるか小さすぎるか、どちらかの不具合が必ず生じることになる。(A486/B514) 第二アンチノミーについてもこの事情は成立している。

第二に、もしも空間におけるすべての現象（物質）が無限に多くの部分から成立しているのならば、分割の背進は、君たちの観念にとってはつねに大きすぎる。また、もしも空間の分割が、その項（単純なもの）のところで途絶えるのならば、空間は無条件的なものの理念にとっては小さすぎる。というのは、この項は、いまだに、そのうちに含まれているより多くの部分への背進を余しているからである。（A487f./B515f.）

仮象が生じる原因をめぐるとこのような診断を経たうえで、最終的に第二アンチノミーの定立と反定立は、両方ともが偽であるとの判定が下されるのである。

ここまででまとめた第二アンチノミーをめぐると議論の妥当性には多くの問題がある。そもそもカントが言うような問題状況は成立しているのだろうか。成立しているとして、カントの示した解決は解決たりえているのだろうか。こういった点について、解釈史のなかでさまざまな検討がなされている。<sup>(10)</sup>しかし、本節の目的は、第二アンチノミーの概要の確認にある。議論を次の段階に進めることとしたい。

## 2 『純粹理性批判』の性質の理論

### （1）汎通的規定の原理と実在性

本節の目的は、『純粹理性批判』が性質をどのように論じているのかを確認することにある。

物がさまざまな性質をもつ、という常識的な存在論から出発しよう。たとえば、ある物理的実体は、クッションである、ナイロン製である、500gの質量をもつ、50cm × 50cm × 10cmの直方体である、水色である、モチモチした触り心地がする、薔薇の香りがする、北海道の札幌市に

ある、等々の性質をもつだろう。では、『純粹理性批判』はこういったことをどのように説明するのであろうか。

『純粹理性批判』は、物が性質をもつことを「述語を付与される」や「規定をもつ」といった表現で示す。ここではこれらの表現をほぼ同義のものとして扱うこととしたい。

物が性質あるいは規定をもつことの全体的な説明は、「超越論的弁証論」[純粹理性の理想][超越論的理想(超越論的原型)について]で与えられる。そこでカントは伝統的な形而上学の「汎通的規定の原理」を検討し、換骨奪胎したかたちで自らの体系のうちに取りこむ。

汎通的規定の原理は、「すべての存在するものは汎通的に規定されている」という命題で定式化される。(A573/B601) 物が一般的にもちうるあらゆる規定を考えよう。ある物が現実存在するのであれば、その物は、あらゆる規定について、それをもつかもたないかが決定されている、というわけだ。

しかし、すべての物は、その可能性からすると、さらに汎通的規定の原則のもとにある。この原則にしたがうと、物には、物のすべての可能な諸述語のうちから、それらの述語がその反対と比較されるかぎり、その一方の述語が帰属しなければならない。(A571-2/B599-600)

カントによれば、汎通的規定の原理は、論理的な原理である排中律とは異なる。<sup>(11)</sup> 汎通的規定の原理は超越論的な原理として、述語の内容にも関わる。ここで、述語の内容について語るさいに使われる概念が、質のカテゴリーに属する「実在性」、「否定性」、「制限性」である。

述語は、たんに言語表現上で肯定的であるか否定的であるかとは別に、内容として、ある性質の存在を表現するか非存在を表現するか、という違



いをもつ。なんらかの性質について、それがあることを表現する概念は「実在性」であり、ないことを表現する概念は「否定性」であるとされる。

カントの挙げる具体例の一つは、「光」と「闇」である。「光」は光の存在を意味するのにたいして、「闇」は光の欠如を意味する。言葉のうえでは、光を「闇でないもの」と呼ぶことも可能であるが、内容の観点からすれば、「光」が肯定的な述語で「闇」が否定的な述語であることは動かない。かくして、超越論的には「光」は実在性に、「闇」は否定性に割りあてられるのである。(A574/B602)<sup>(12)</sup>

この議論を踏まえて、汎通的規定の原理は、以下のように定式化される。すべての実在的な性質を有するような存在者の概念を理念として定立する。そのとき、その他の現実存在する物の概念は、どんなものであれ、この理念に含まれるいくつかの性質を適宜否定することによって、つまり、この理念を制限することによって表現することができる。

それゆえ、我々の理性における汎通的規定にとって超越論的規定がその根底に置かれており、この超越論的基体が、そこから物のすべての可能な述語が取ってこられうるような、いわば素材の全貯蔵を含んでいるのであれば、この基体は、実在性の全体 (omnitudo realitatis) という理念にほかならない。(A575-6/B603-4)

このように、汎通的規定の原理は、『純粹理性批判』の性質の理論の基本的な構図として機能し、物がさまざまな性質をもつということの理解を支える。<sup>(13)</sup>

もちろん、ここにはいくつかの留保がある。この原理は構成的なものとしてではなく、統制的なものとして理解されねばならない。人間的な主体が認識活動において汎通的規定の成立に立ちあうことは原理的にない。あたかも汎通的規定が成立しているかのような想定のもとで認識活動を行う

ことが合理的であるだけである。この点を誤解することから、神の現実存在を証明しようという仮象が生じるというのが、特殊形而上学の一部門である神学にたいする超越論的哲学の診断であった。しかし、本論文が強調したいのは、このような留保にもかかわらず、汎通的規定の原理が性質の理論のモデルとして、現象の存在論にたいしてさえ積極的な役割を果たしているということなのである。<sup>(14)</sup>

## (2) 偶有性としての実在性

「超越論的弁証論」に位置する「超越論的理想（超越論的原型）について」は、物が性質をもつことを「実在性」の概念で捉えた。『純粹理性批判』における配置からすれば、順序は逆になるが、ここで「超越論的分析論」に目を向けたい。確認したいのは、『純粹理性批判』における性質が「偶有性」と呼ばれる種類の性質に限定されるということである。

まず、関係のカテゴリーに注目しよう。関係のカテゴリーの第一項とされるのが、実体と偶有性（Akzidenz）のカテゴリーである。ちなみにカテゴリー表で「実体」と対をなしているのは「内属性（Inhärenz）」であり、「偶有性」はそのラテン語訳として添えられている。しかし、以降のカントは基本的に「偶有性」という語を使っていくので、本論文もそれに従う。<sup>(15)</sup>

カントが「偶有性」という語を選択したことは、「超越論的分析論」で論じられる性質が限定つきのものであることを示唆する。そこでは、性質一般のうち、偶有性のみが扱われるのである。

「純粹悟性のすべての原則の体系」「経験の類推」「第一類推」は「偶有性」概念を以下のように説明する。

実体の諸規定は、実体が存在する特殊な様式にはかならないものであり、偶有性と呼ばれる。偶有性はつねに実在的である。なぜならば、それらの偶有性は実体の現実存在に関係するからである。（否定性は、

たんに、実体のもとでのなにかあるものの非存在を表現するような規定でのみある。) (A186/B229)

偶有性は、「実体が存在する特殊な様式」とされる。これは、偶有性が、実体をもつことももたないこともある規定、つまり、偶然的な性質だということを示している。さらに、この偶有性は、先ほど確認した実在性と対応させられてもいる。すなわち、「超越論的弁証論」「超越論的理想（超越論的原型）について」での実在的な性質は、「超越論的分析論」では偶有性として把握されるのである。

### (3) 外延量と内包量の区別

ついで、量および質のカテゴリーに目を向けよう。

「原則の体系」において、量と質のカテゴリーは数学的カテゴリーとして前半部に置かれ、関係のカテゴリーに先立って論じられる。しかし、数学的カテゴリーは、実際には、偶有性を備えた物の存在を前提したうえで、その物をもつ性質を表現している。<sup>(16)</sup>

量と質のカテゴリーの違いは、外延量と内包量という対比によって説明される。カントによれば量のカテゴリーは外延量を、質のカテゴリーは内包量を扱うのである。

この事情を説明してくれるのは、「原則の体系」において示される二つの数学的原則、「直観の公理」と「知覚の予料」である。

「原則の体系」「直観の公理」は、外延量について以下のように説明する。

私は、そこにおいて部分の表象が全体の表象を可能にするような(そして、それゆえ部分の表象が全体の表象に先立っているような)量を、外延量と呼ぶ。(A162/B203)

「外延量」ということで、カントは、単位の合計というかたちで数学的に表現できる量のことを考えている。そして、少なくとも「直観の公理」のうちで念頭に置かれている外延量は、空間および時間の規定ということになる。

それにたいして、「知覚の予料」は内包量を以下のようなものとして説明する。

さて、私は、単一性としてのみ把握され、またそこにおいては数多性がただ否定性=0へと近づくことによるのみ表象されるような量を、内包量と呼ぶ。(A168/B210)

内包量は、合成されたものではなく、単一なものとして把握される。ただし、内包量は、強さの度合いによる比較は許すとされる。「知覚の予料」は、感覚が内包量として表現されうるということを確認したうえで、そこから、感覚に対応する実在性もまた、内包量として表現されうると主張する。

まとめれば、量のカテゴリーは外延量で表現されるかぎりでの性質を扱い、質のカテゴリーは内包量で表現されるかぎりでの性質を扱うのである。<sup>(17)</sup>

さて、これまで論じてきたカントの性質の理論では、性質は基本的に実在性として捉えられてきた。「超越論的理想(超越論的原型)について」では、物が性質をもつことが実在性として捉えられていた。<sup>(18)</sup>「第一類推」では、実体をもつ偶有性が、これまた実在性に訴えて説明されていた。この実在性は、質のカテゴリーの一項であり、「知覚の予料」の原則において以下のように導入されている。

知覚の予料

この原理は、以下のものである。すなわち、あらゆる現象において、

感覚の対象である実在的なものは、内包量を、すなわち、度をもつ。  
(B207)<sup>(19)</sup>

『純粹理性批判』における叙述の順序からすると「知覚の予料」は「第一類推」の前にある。そのため、原則そのものから「実在的なもの」が性質を指していることは少々見てとりにくい。そのため、本論文は「知覚の予料」、「第一類推」、「超越論的理想（超越論の原型）について」を頁の順序とは逆に辿ってきた。それにより、「知覚の予料」が偶有性の特徴づけとしても理解できることが確認されたのである。

#### (4) 問題提起

ここまでの整理を踏まえて、二つの問題を指摘することができる。それらが本論文の主題となる問題である。一つめの問題は、本節の整理のうちでの不整合であり、二つめの問題は、前節と本節のあいだの不整合である。

一つめの問題は以下のとおりである。

本節はまず「超越論的理想（超越論の原型）について」を検討した。そこで結論として、物が性質をもつことは質のカテゴリーによって記述される、という理解が得られた。

本節はついで「原則の体系」を検討した。そこから、物がもつ性質として、偶有性のみが扱われることが確認された。そして、その偶有性は、質のカテゴリーにより内包量をもつものとして把握されるのであった。

ここで問題となるのは、量のカテゴリーに対応する性質の位置づけである。量のカテゴリーは時空的な規定を司るものであり、当然、物がもつ時空的性質はこのカテゴリーに服するはずである。しかし、ここまで確認してきた性質の理論には、時空的性質を位置づける場所がない。繰り返かえしになるが、性質は第一義的に偶有性として把握され、偶有性は質のカテゴリーで表現される。時空的性質は偶有性に含まれないように思われるので

ある。我々は時空的性質、とりわけ本論文の関心事である空間的な性質をどのように理解すべきだろうか。

二つめの問題は以下のとおりである。

「直観の公理」が教えるところでは、空間的な規定は外延量として量のカテゴリーによって把握されるべきものである。物のもつ大きさは空間的な広がりであるから、大きさは量のカテゴリーによって扱われるべきものである。

ところが、「純粹理性のアンチノミー」において、質のカテゴリーに対応するのは第二アンチノミーである。第二アンチノミーは、単純実体の存在をめぐる、あるいは同じことであるが、実体の無限分割可能性をめぐる形而上学的論争を主題としていた。ここで論じられる分割は、対象のもつ空間的な広がりでの分割である。つまり、物がもつ大きさが、質のカテゴリーに属するものとして扱われている。

カテゴリーの区別は排他的なものであるはずだ。大きさという同じ主題が量のカテゴリーで扱われ、かつ、質のカテゴリーで扱われることをどのように理解すべきだろうか。

節をあらためて、これら二つの問題を解決すべく、カントの性質の理論の内実をさらに検討していくこととしたい。

### 3 性質の分類と「不可入性」概念の導入

#### (1) 性質の分類について

議論に先立って、性質に二種類の区別を導入し、性質を三つに分類しておきたい。

一つめの区別は内在的性質と外在的性質の区別である。内在的性質とは、あるものが単独でもちうる性質のことであり、外在的性質はそれ以外の性質のことである。二つめの区別は必然的性質と偶然的性質の区別である。

これは文字どおり、あるものが必ずもつ性質とあるものがもつことももたないことありうる性質との区別を指す。この二つの区別を組みあわせて、以下では三種類の性質を考えたい。

- 1) 必然的かつ内在的な性質
- 2) 偶然的かつ内在的な性質
- 3) 偶然的かつ外在的な性質<sup>(20)</sup>

この分類が時代錯誤であるとの疑いを避けるため、カントも使用していたヴォルフ学派の教科書、バウムガルテン『形而上学』における性質の分類との対応関係を簡単に見ておく。

『形而上学』§32から§38は、以下のように述べる。<sup>(21)</sup> 性質一般は、内的規定と関係に区別される。内的規定は、本質的部分と変状に区別される。本質的部分の集合は本質を形成する。本質から導出される性質が変状である。変状は、属性と様態に区別される。属性は本質のみから導出されるもの、つまりは本質の論理的帰結である。それ以外の変状は、様態と呼ばれる。まとめれば以下の引用ようになる。ただし、ここでは「関係」が「偶然的性質」と呼ばれている。

### § 39

任意の物がもつ任意の規定は、本質的部分であるか、属性であるか、偶然的性質であるか、それらの関係であるかのいずれかである。§ 32、34、38。<sup>(22)</sup>

このような『形而上学』における性質の分類は、先ほど示した分類と以下のように対応する。

- 1) 内的規定と関係の区別は、上の分類の内在的性質と外在的性質の区別にほぼ対応する。
- 2) 本質的部分と属性を合わせたものが、必然的かつ内在的な性質にほぼ対応する。
- 3) 様態は、偶然的かつ内的な性質にほぼ対応する。

すなわち、本論文が導入する分類は、カントの時代の教科書的な分類をいくぶんか単純化したものにすぎない。『純粹理性批判』においても、この分類は機能していると考えてよい。

## (2) カントの「偶有性」概念の問題

本筋からは外れた補足的な話題となるが、ここで「偶有性」概念について確認をしておきたい。本論文は以下、基本的にカントの言う「偶有性」を「偶然的性質」を意味するものとして議論を進める。しかし、様相論理が整備される前の哲学者たちの様相理解には混乱が見られ、それはカントにおいても例外ではない。<sup>(23)</sup>

「必然性／偶然性」という概念対を考えよう。現代的な理解では、必然性とは、あらゆる可能世界で成立することであり、偶然性とは、可能世界に相対的に成立したりしなかったりすることである。ところが、カントは「必然性／偶然性」を可能世界にではなく時間に関連させて説明する。このとき、「偶然的性質」は、現実世界でその物が時点に相対的にもったりもたなかったりする性質のこととなる。

このような様相理解は、「超越論的図式機能」において、必然性の図式を「すべての時間における対象の現存在」(A145/B184) とする議論などからも見てとれる。しかし、本論文では偶有性が話題の中心となっていることもあり、「第一類推」の原則で「偶有性」概念が導入されるしかたに目を向けてみたい。



第二版「第一類推」の原則は以下のようなものである。

#### 実体の持続性の原則

現象のあらゆる交替にさいして実体は持続しており、そして、実体の量は自然において増大も減少もしない。(B224)<sup>(24)</sup>

さまざまに性質が変化しても、それらの性質の担い手は同一性を保つ。この事情を記述すべく、実体と偶有性という概念対は導入される。この説明での「偶有性」は、実体が通時的同一性を保つ一方で、時間的に変化する性質を意味することになる。そして、このような「偶有性」の「偶然性」は、現代的な理解とは異なる意味をもつことになる。

意味がずれる事例を挙げておこう。二卵性の双子の子犬、ペペとポポが生まれた、ペペの毛皮はブチで、ポポの毛皮は黒だった。さて、双子に黒犬がいるのだから、ペペが黒犬に生まれる可能性もあったはずだ。このとき、ブチの毛皮であるというペペの性質は偶然的性質であろう。しかし、一度決まった毛皮の色はその世界のなかでは不変である。それゆえ、カントの基準ではこの性質は偶有性ではなくなりそうである。また、カントにおいて「神は必然的存在である」という命題が、「神はあらゆる可能世界に存在する」という意味ではなく、「神は永続的に存在する」という意味に引きつけてしばしば論じられる点にも、問題の意味のずれを見てとることができるだろう。<sup>(25)</sup>

カントは確信犯として「必然性／偶然性」にこのような独特な意味を与えている。

事実、我々が偶然的な現実存在の実例を挙げるべきときには、我々はつねに変化に言及するのであって、たんに反対の思考の可能性に言及しはしない。(B290)

しかし、実際には、カントの「必然性／偶然性」の用法は一貫していない。「必然性」で言えば、今しがた確認した意味の他にも、論理的必然性、因果的必然性、認識的必然性といった意味でもカントはこの語を使っており、その混乱に自覚的ではない。<sup>(26)</sup> ただし、この混乱は本論文の論旨にあまり影響しないので、確認するのみにとどめる。

### (3) 問題解決のための前提の確認

前節の最後で提示した二つの問題について、本論文が与える解決の方向性を示しておきたい。

先ほど物がもつ性質を以下の三つに分類した。

- 1) 必然的かつ内在的な性質
- 2) 偶然的かつ内在的な性質
- 3) 偶然的かつ外在的な性質<sup>(27)</sup>

そのうえで、本論文は以下のように考える。これらを踏まえることで、二つの問題に解決を与えることができるようになる。

- イ) 『純粹理性批判』においては、少なくとも現象としての物にかんして、必然的かつ内在的性質が語られる場面はない。
- ロ) 偶有性は、物がもつ偶然的かつ内在的な性質である。
- ハ) 物がもつ空間的な性質は二種類に区別しうる。一つめは、物がもつ位置や方向であり、これは偶然的かつ外在的な性質である。二つめは、物がもつ大きさや形態であり、これは、以下で述べる特殊な意味で、偶然的かつ内在的な性質として扱われる。
- ニ) 物がもつ位置や方向は、偶有性ではない。
- ホ) 物がもつ大きさや形態は、不可入性という偶然的かつ内在的な性質か

ら生じた結果である。

つづけて、これらをさらに詳しく説明していきたい。

#### (4) 内在的な性質と外在的な性質の区別

これまで検討してきた性質の理論で論じられていたのは偶有性のみであり、必然的かつ内在的な性質は登場していない。それは、『純粹理性批判』においては、必然的かつ内在的な性質への認識論的な接近可能性が認められていないからである。そこで、以下でも偶然的な性質のみを扱うこととする。<sup>(28)</sup>

「反省概念の多義性のための註解」において、カントはライブニッツの不可識別者同一の原理を以下のように論じることにより批判する。

もちろん、私が一滴の水を、物それ自体として、あらゆるその内的な諸規定にしたがって知っていたとしても、別の一滴の水の全概念がその水滴と同じであるならば、私はいかなる水滴をも別の水滴と異なるものと見なしえない。しかし、その水滴が空間における現象であるならば、その水滴はその場所を、たんに悟性において（諸概念のあいだに）のみもつのではなく、感性的な外的直観において（空間において）ももつ。そして、ここでは物理的な場所は、物の内的な規定にかんしてはまったく無関係である。そして、場所 = b は、場所 = a にある別の物と完全に類似し等しいような、そういった物を収容しうる。それは、その物がその別の物と内的にきわめて異なっているときに収容しうるのと、まさに同様のことである。(A272/B328)

この議論によれば、二つの水滴は内的規定が同一であっても場所を異にすることがありうる。つまり、場所の規定は内的規定ではない。カントは

ここで、内在的な性質と外在的な性質の区別を当然のように前提している。この区別は、内在的な性質に偶有性を割りあて、外在的な性質に場所の規定すなわち位置を割りあてることで、よりよく理解できる。物は偶有性をもつと言われるさいには、物の内在的な性質しか考えられていない。物がもつ偶然的な性質は偶有性だけではない。どの場所にあるのかも、物がもつ性質の一つではあるが、外在的な性質であるがゆえに、偶有性には含まれていないのである。

ところで、先ほど、偶然的かつ外在的な空間的な性質として、位置と方向を挙げた。上述の引用は位置についてしか語っていない。『純粹理性批判』は、空間的な方向について明示的に語らない。<sup>(29)</sup>しかし、事柄に照らしてみれば、方向も位置と同じく外在的な性質と見なしてよい。

ここまでの議論で、論点イ) およびロ) と、論点ハ) の半分までが説明された。

#### (5) 「不可入性」概念への注目

物がもつ偶有性は、実在性として捉えられていた。ここで、実在性の具体例に目を向けてみたい。「知覚の予料」は、「重力」(A168-9/B210)、「色」、「熱」、(A169/B211)、「不可入性」、「重さ」(A173/B214) といったものを実在性の例として挙げている。これらの例は、「実在性」ということで理解すべきものが、基本的に、物がもつ力であるということを示唆する。<sup>(30)</sup>

この事情は、『純粹理性批判』ではいささか見えにくい。しかし、『自然科学の形而上学的原理』では、この発想が明快に打ちだされている。質のカテゴリーに対応するとされる「動力学」章が、その箇所である。そこでカントは、物がもつ内在的な性質を論じる。そして、引力と斥力という二つの根本力から、さまざまな物理的性質を説明していく。そして、そういった物理的性質が、総じて実在性として把握される。このように、実在性は物がもつ力であり、その力の度合いが内包量として数学的に測定可能であ

る、というものが、カントの主張なのである。

さて、ここで本論文が注目したいのが、先ほどの実在性の例のなかにあった、不可入性という性質である。『純粹理性批判』は不可入性について説明をしないので、ここでも『自然科学の形而上学的原理』を参照してみたい。この著作は、「絶対的な不可入性」と「相対的な不可入性」を対比させつつ導入する。

#### 説明四

圧縮の度合いに比例して増大するような抵抗にもとづく物質の不可入性を、私は相対的な不可入性と呼ぶ。しかし、物質それ自体がいかなる圧縮も許容しないという仮定にもとづく不可入性は、絶対的な不可入性と呼ばれる。絶対的な不可入性による空間の充足は、数学的な空間の充足と呼ばれうるが、たんなる相対的な不可入性による空間の充足は、動力学的な空間の充足と呼ばれる。(4：501-2)

そのうえで、カントは「相対的な不可入性」を採用すべきだと主張する。[[……] したがって、空間の充足はただ相対的な不可入性としてのみ見なされるべきである。] (4：502) それは、絶対的な不可入性が「隠れた質」(4：502) であって科学的説明において機能しないからである。他方、外部からの圧縮への抵抗という観察可能な事象にもとづくがゆえに、相対的な不可入性はものごとの科学的な説明に役立つのである。<sup>(31)</sup>

不可入性そのものは、物をもつ力であり、内在的な性質である。さて、力は、なんらかの結果を引きおこすことにおいて力である。そして、不可入性が引きおこす結果とは、「動力学的な空間の充足」(4：502)、すなわち、それをもつ物が、他の物を排除することで、一定の大きさや形態を顕示することにほかならない。

ここで注目すべきは、大きさや形態といった性質の位置づけである。こ

れらは空間的な性質であり、外延量として量のカテゴリーに服する。この点からすれば、これらは偶有性ではない。しかし、大きさや形態は、不可入性という偶有性の結果である。それゆえ、偶有性に準ずるかたちで扱われるのである。他方、同じ空間的な性質であっても、位置や方向は、偶有性の結果ではないので、このような扱いを受けることはない。

ここまでの議論で、論点ハ)の残り半分と、論点二)およびホ)が説明されたことになる。

#### 4 第二アンチノミーの空間論

##### (1) 一つめの問題の解決

前々節の最後で二つの問題が提示された。いまや、これらの問題に答えることができる。

一つめの問題は、空間的な性質はカントの性質の理論にどのような位置をもつか、であった。

この問題にたいする答えは以下のとおりである。空間的な性質のうち、位置や方向は外在的な性質として位置づけられる。空間的な性質のうち、大きさや形態は、不可入性の結果として、内在的な性質として扱われる。

カントを離れて考えてみれば、大きさや形態は、物の内在的な性質の典型例である。しかし、カントは、外延量と内包量を区別したうえで、偶有性と内包量を結びつける。このようにすると、なんらかの対策を取らなければ、空間的な性質が総じて偶有性ではなくなるという帰結が導かれてしまう。不加入性への着目は、このような直観に反する帰結を回避し、大きさや形態が物の内在的な性質である、という自然な理解を維持することを可能にしてくれるのである。<sup>(32)</sup>

## (2) 二つめの問題の解決

二つめの問題は、第二アンチノミーが質のカテゴリーに対応するアンチノミーであるにもかかわらず、量のカテゴリーに服すべき空間的な性質を扱っているのはなぜか、であった。

ここで、第二アンチノミーがなにを分割しているのかを考えなければならない。第二アンチノミーは、物あるいは実体を分割しているのであり、空間それ自体を分割しているのではない。

「超越論的感性論」で、カントは「空間は無限の与えられた量として表象される」と述べる。(B39-40) 延長についても分割についても、空間それ自体が無限であることはすでにこの段階で確立されている。第二アンチノミーの係争点は、空間それ自体がもつ無限分割可能性を、大きさや形態をもつ物もまた備えているのかどうか、ここにある。<sup>(33)</sup>

それゆえ、「第二アンチノミーのための注解」において、定立側は、以下のように、空間それ自体と物とのあいだの差異を強調することになる。そうすることで、単純実体の成立可能性を確保しようとしているのである。

空間は本来複合体と呼ばれるべきではなく、総体と呼ばれるべきである。なぜならば、空間の部分はただ全体においてのみ可能であり、全体が部分によって可能なのではないからである。(A438/B466)

しかるに、物のほうは複合体である。空間と物を重ねてはならないのだ。他方、反定立側は別様に考える。こちらもまた、空間それ自体と物を区別してはいる。しかし、反定立側は、空間それ自体が無限分割可能性をもつのであれば、物もまた同じ特徴を備えているはずだ、と考える。「超越論的感性論」によれば、現象としての物は空間を占めることで存在する。そうであるならば、空間と物は重ねられるはずだ。以下の引用はそう述べている。

しかるに我々は、たんなる現象としてのみ物体について概念をもつ。しかし、その物体は現象として、空間をあらゆる外的現象の可能性の条件として必然的に前提する。だから、[モナド論者の] 言い逃れは無駄である。そのような言い逃れは、実際、先立ってまた超越論的感性論において十分に阻止されたのである。(A439/B467)

このように、第二アンチノミーは、空間それ自体を分割することと、物を分割することとを明確に区別している。そのうえで、空間それ自体ではなく物を分割する、という問題設定にそくして成立している。<sup>(34)</sup> 第二アンチノミーが分割しているのは、物がもつ不可入性という偶有性によって引きおこされた、物がもつ一定の大きさや形態なのである。<sup>(35)</sup> それゆえ、第二アンチノミーは空間的な性質の分割を扱いつつも、質のカテゴリーに属するアンチノミーとして体系上の位置を与えられるのである。

### (3) 第二アンチノミーと『純粹理性批判』の体系

本論文は、『純粹理性批判』を解釈するさいに『自然科学の形而上学的原理』を参照した。それは、『純粹理性批判』には、力や不可入性についての詳細な説明が欠けていたからである。もちろん、抽象度の高い超越論的な議論を展開すべき『純粹理性批判』にこの種の説明が欠落するのは当然のことではある。しかし、第二アンチノミーにかんしては、この説明不足は特別な意味をもつ。最後にこの点を指摘しておきたい。

「純粹理性のアンチノミー」第一節「宇宙論的理念の体系」において、カントは、あらゆるアンチノミーに共通する理性の原則を提示する。

理性はこのこと[絶対的な全体性など]を以下のような原則にのっとりて要求する。すなわち、条件づけられたものが与えられているときには、諸条件の総体も、したがって、条件づけられたものがそれによっ



てのみ可能であるような、端的に無条件的なものも与えられているのである。(A409/B436)

アンチノミーは、所与のものを条件づけられたものと見て、その条件を問うことから生じる。第二アンチノミーについて言えば、それは、与えられた一定の大きさをもつ物を前にして「なぜこの物はこのような大きさなのか」と問い、いわばその充足根拠を探究するということである。

ここで考えたいのは、そのような問いを発する理性がいったいなにを知りたいと思っているのかである。『純粹理性批判』の体系構成からすれば、理性が知りたいのは「所与のものを生みだした諸部分の合成はどんなものだったか」でなければならない。第二アンチノミーは部分と全体の合成関係において成立する。それ以外のことを理性が知りたがった場合には、第二アンチノミーが体系に上手く位置づかない。

しかし、これまでの考察は、カント理論哲学の枠内ですら、別の答えかたがありうることを示唆する。物がそのような大きさをもつという結果を導いたのは、物の不可入性である。それならば、『自然科学の形而上学的原理』が試みたように、不可入性という性質がより基礎的な物理的性質からどのように成立するのかを説明することもまた、「なぜこの物はこのような大きさなのか」の答えになりうる。理性が知りたかったのはこちらかもしれない。力や不可入性についての説明不足は、このような可能性を隠すことに役立っている。それにより、根拠を求める理性の問いの解釈が一定の方向に誘導され、『純粹理性批判』の体系性が守られているのである。

## おわりに

本論文は、第二アンチノミーにおいて論じられた無限分割をめぐる伝統的な形而上学的問題を、『純粹理性批判』の性質の理論に位置づけるかた

ちで検討した。そこから確認されたのは、カントの理論哲学において、二種類の空間の捉えかたを区別することができるということであった。一つは、物を位置づける場として空間を捉えることであり、もう一つは、物そのものもつ広がりとして空間を捉えることである。もちろん空間はただ一つしかないが、これら二つの捉えかたは、異なる哲学的な扱いを必要とするのである。

### 参考文献

- Sadik J. Al-Azm, *The Origins of Kant's Argument in the Antinomies*, Oxford: Oxford University Press, 1972.
- Henry E. Allison, *Custom and Reason in Hume: A Kantian Reading of the First Book of the Treatise*, Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysik*, übersetzt von Georg Friedrich Meier, Dietrich Scheglmann Reprints, Jena, 2004.
- Michelle Grier, "Transcendental Illusion And Transcendental Realism In Kant's Second Antinomy", *British Journal for the History of Philosophy*, 6.1, 1998, pp.47-70.
- Ivor Leclerc, "Kant's Second Antinomy, Leibniz, and Whitehead", *The Review of Metaphysics*, vol. 20, No. 1, 1966, pp. 25-41
- Oscar Schmiede, "What Is Kant's Second Antinomy About", *Kant-Studien* 97, 2006, pp.272-300.
- James Van Cleve, "Reflections on Kant's Second Antinomy", *Synthese*, vol. 47, No. 3, 1981, pp. 481-94.
- Robert Watt, "Three Myths About Kant's Second Antinomy", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 101(2), 2019, pp.258-79.
- Marx Willaschek, *Kant on the Sources of Metaphysics: The Dialectic of Pure Reason*, Cambridge; Cambridge University Press, 2020.
- ピエール・ペール『歴史批評事典Ⅲ』、『ピエール・ペール著作集』第五巻、野沢協訳、法政大学出版局、1987年。

桧垣良成『カント理論哲学形成の研究——「実在性」概念を中心として』、溪水社、1998年。

福谷茂『カント哲学試論』、知泉書館、2009年。

犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学『自然科学の形而上学的原理』の研究』、拓殖大学研究草書、2011年。

増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』、北海道大学出版会、2015年。

滝沢正之「カントにおける「無」の問題」、『駒澤大学文化』第34号、2016年、pp.92(37)-55(74)。

滝沢正之「カントの様相論」、『理想』、700号、理想社、2018年、pp.64-81。

## 注

- (1) カント『純粹理性批判』からの引用は、慣例にしたがい、1781年の第一版をA、1787年の第二版をBで表記し、原著の頁数を記す。それ以外のカントの著作についてはアカデミー版全集の巻数および頁数を記す。ただし、亀甲括弧 [] の部分は筆者による補足である。
- (2) 後に確認するように、正確には、「実在性」概念は物質そのものではなく、物質のもつ性質に関係する。
- (3) 本論文の主たる関心は空間論にあるため、第二アンチノミーの根本的な狙いについては検討することができていない。この論点については Grier 1998 が論じている。
- (4) たとえば、ハイムゼートの古典的な解釈は、定立側のモノイド論的な発想は心的実体をも念頭に置いている、と主張する一方で、Schmiege 2006 はこのような解釈を批判している。
- (5) ベール 1987, p.931-71。ベールについては Van Cleve 1981, p.481 や Allison 2008, p.39 などがこの問題との関連で言及している。
- (6) 近代より後の哲学者との関係で言えば、Leclerc 1966 がホワイトヘッドと関連づけた議論を行っている。
- (7) たとえば Al-Azm 1972, p.53 が挙げられる。
- (8) たとえば Allison 2008, ch.2 が挙げられる。
- (9) 同様の方針を採用するまとは少なくない。ただし、Watt 2019 はそのよ

うな理解は誤っていると論じている。

- (10) Van Cleve1981 は、論文全体をつうじて、カントが他の可能な解決の可能性を十分に排除できていないことを示している。
- (11) カント自身の表現では「矛盾律」である。
- (12) このような発想は「超越論的分析論」末尾の「無の表」の「欠如無」にも見られる。滝沢 2016, pp. 78 (51) - 60 (69) を参照。
- (13) 汎通的規定の原理についてのより詳細な説明を福谷 2009, pp. 126-8 や Willaschek 2020, pp.220-5 が与えている。
- (14) 「超越論的分析論」における「実在性」概念と「超越論的弁証論」における「実在性」概念を繋げるためには、本来ならばより慎重な手続きが必要となるが、ここでは扱うことができなかった。『純粹理性批判』における「実在性」概念については桧垣 1996 が精緻な分析を行っている。
- (15) 「第一類推」で示される詳細な説明では、「内属性」と「偶有性」は意味が異なっている。実体が偶有性をもつという事態が現実<sup>に</sup>成立しているさいに、その状態を指すのが「内属性」とされるとされる。(A187/B230)
- (16) この事情がよく見えるのは、「純粹理性の誤謬推理」における四つの誤謬推理の配置である。(A344/B402)
- (17) 数学的の量としての表現可能性を重視する態度は、『自然科学の形而上学的原理』で明確に示される。これらの著作の主張の異同については犬竹 2011,p.33 を参照。
- (18) くわえて、性質をもたないことは「否定性」に、性質がまさにその特定の性質であることは「制限性」に訴えることで捉えられていた。
- (19) 第一版での「知覚の予料」は以下のとおりである。「あらゆる知覚をそのようなものとして予料する原則は、以下のものである。すなわち、あらゆる現象において、感覚は、そして、その感覚に対象のもとで対応する実在的なもの（フェノメノンの実在性）は、内包量を、つまり、度をもつ。」(A166)
- (20) 必然的かつ外在的な性質の可能性はとりあえず考えずに話を進める。
- (21) Baumgarten 2004, pp.14-5.
- (22) Baumgarten 2004, p.16.
- (23) 滝沢 2018 では、この混乱をうけて、少なくとも「超越論的分析論」を一貫して読む場合には、カントが扱っている様相は認識様相であると解釈する

ことがよい、という提案を行った。

- (24) 第一版の記述は表題が「持続性の原則」となっており、以下のようになっている。「あらゆる現象は、対象自体としての持続的なもの（実体）と、持続的なものたんなる規定、つまり、対象が存在する様式としての交替可能なものを含む」。(A182)
- (25) たとえば、「神の現実存在についての宇宙論的証明の不可能性について」では、神の必然性が時間的な永続性以上のものであるということが語られる。(A613/B641) こういったことが問題になること自体が、必然性が時間に引きつけて理解されていることを示している。
- (26) 前注 23 を参照。
- (27) 「必然的かつ外在的」という組みあわせについてはここでは考えない。
- (28) 二点指摘しておきたい。一点め。よくある現代的な理解では、物の自然種が必然的性質と見なされる。『純粹理性批判』は類種概念を「純粹理性の理念の統制的使用について」において、理性の統制的な機能から説明しようとしている。二点め。『自然科学の形而上学的原理』では議論の位相が変わり、引力と斥力を代表とする、物をもつ基本的な物理的性質が本質として論じられることになる。
- (29) 周知のように、空間的な方向にかんする考察は 1768 年の『空間における方位の区別の第一根拠について』において扱われていたが、『純粹理性批判』では姿を消している。
- (30) 犬竹 2011, pp.85-6 がより詳細にこの事情を説明している。
- (31) 相対性を重視するという論点は『純粹理性批判』にも見てとることができる。「経験的悟性使用と超越論的悟性使用との取りちがえによる反省概念の多義性について」において、カントは反省概念の一つである「内的なもの」と「外的なもの」を説明する。そのさいカントは以下のように述べる。「それにたいして、空間におけるフェノメノンの実体の内的な諸規定は関係にはかならない。そして、フェノメノンの実体自体が、まったくもって、たんなる関係の総括である。」(A265/B321) この引用は、内在的な性質の外在的な性質（関係）への還元を主張するものというよりは、力の理解において相対性が重要であることを指摘したものとして読むことができる。
- (32) 外延量と内包量の両方に関係する性質は他にもある。それは、たとえば速

度である。『自然科学の形而上学的原理』「運動学」でカントは速度の扱いについて注意を喚起する。速度を、物体が通過した空間から、つまり、外延量から説明することができる。しかし、カントによれば、速度それ自体は外延量ではなく内包量である。なぜならば、速い速度は、部分としての遅い速度の合成物ではないからである。(4:493-4) この論点は、犬竹 2011, p.16 に指摘がある。

- (33) ちなみに『自然科学の形而上学的原理』に至ると、この重ねあわせは認められ、物にかんしても無限分割が承認されることになる。(4:503)
- (34) この区別は、たとえばベールによるエレアのゼノンの紹介には見られない。しかし、カントの独創というわけでもなく、いわゆるヴォルフ学派の発想であったと思われる。増山 2015, p.52 が、バウムガルテンやマイヤーに類似した発想の区別がすでにあることを示している。
- (35) 『自然科学の形而上学的原理』は、不可入性を「物質の根本性質 [Grundeigenschaft]」(4:508) としている。これは、物は本質的に、つまりは必然的に不可入性をもつことを意味する。ところが、本論文はずっと不可入性を偶有性的一种として扱ってきた。このことは、一見すると不整合に思われるが、そうではない。不可入性が必然的であると言われるさいに意味されているのは、物がなんらかの不可入性を必然的に備えているということである。他方、不可入性が偶有性であると言われるさいに意味されているのは、物が現実的にもっている特定の不可入性の度合いが別様でもありえたとということである。ここに不整合はない。